

門浪会会報 2009 年 第二号

閉校にあたって

福岡県立門司北高等学校 第33代校長 田中 妙子



門司も桜の花の美しい時となり、学校から臨む周防灘もキラキラと輝いています。

閉校にあたり、これまで、霜原会長を始め、会員の皆様に温かいご理解とご支援を賜りましたことに深く感謝申し上げます。特に、一昨年度の学校創立百周年事業や記念誌の発行、また、今回の閉校までの諸事業について、多大なご支援と心のこもった御激励をいただきましたことは、閉校を控えて、ふっと寂しさのこみ上げてくる生徒や私共職員の心にしみ、嬉しくありがたいものでございました。重ねて深くお礼申し上げます。

本校は、言うまでもなく、明治40年に門司市立門司高等女学校として開校し、「門女（もんじょ）」の愛称で親しまれ、幾多の変遷を経てまいりました。門浪会の皆様には、「白萩」の美しい門司古城山麓の谷町や清見の旭ヶ丘、猿喰と本校で過ごされた場所に違いはあることとは思いますが、平成20年度は、「前向きに、心豊かに、たくましく」を合い言葉に充実した学校生活を送り、3月1日に、万感の思いで最後の卒業生第60期生105人を送り出し、その後、多くの思いや涙が交錯する中、閉校式を挙りました。

今、私共は福岡県立門司学園へとバトンを渡しました。本校のシンボルでもある「白萩」は、

たおやかで優しげ、趣のある花ですが、しっかり根を張り、まとまりよくうねりを作ります。「白萩」に象徴される本校の伝統を、少しでも受け継いでもらいたいと願います。

また、私事ですが、本校に管理職として5年間を勤めさせていただきました。門浪会本部はもとより、関東・関西の支部総会にもお声をかけていただき、感謝いたしております。特に「門女」の皆様方(私の母と同年代の方もおられ)に元気をいただき、校長として背筋が伸びたような気がいたします。また、厚かましくも後輩気分になって、甘えさせてもいただき、心安らぎました。ありがとうございます。最後になりましたが、門浪会の皆様方のますますのご健勝を祈念いたしまして、お礼のご挨拶とさせていただきます。



閉校式

お知らせ



門司高等女学校、門司北高校を卒業された
門浪会会員の皆様への御報告をいたします。

平成 21 年 3 月 10 日

門浪会副会長 岩 田 勝 弥 (北高 15 期)

1) 平成 21 年度門浪会入会式

平成 21 年 2 月 28 日 (土曜日) 11 時 30 分より門司北高等学校体育館において最後の卒業生 105 名の同窓会 (門浪会) 入会式が行なわれました。

門浪会より役員、幹事、金光顧問、合わせて 13 名が出席致しました。田中校長と職員の皆様による愛情の籠もった教育、厳しい指導を受けた最後の卒業生を受け入れました。引き続き門浪会特別表彰式が行なわれました。日本国内及び海外等のレスリングで活躍し優秀な成績を収め北高の名を高めた入江真司君に表彰状及び記念品を贈呈しました。

2) 平成 21 年度門司北高等学校卒業式

平成 21 年 3 月 1 日 (日曜日) 10 時より同上体育館において第 60 回卒業証書授与式が行なわれました。教育委員会委員長、県、市、議会議員、地域の関係者保護者、門浪会より役員、幹事、顧問が出席しました。北高卒業の重松先生、辻先生と礼法指導の西川先生のもと 105 名の卒業生は校長の式辞、委員長の告示、PTA 会長の祝辞を姿勢正しく緊張感を持って受け止めていました。特別表彰として出席皆勤賞 (3 ヶ年) 5 名、学業優秀賞 2 名、部活動功労賞 3 名が表彰されました。



新幹事紹介



卒業証書授与式



受け入れ式に参加した役員、幹事の皆さん



卒業証書授与

3) 福岡県立門司北高等学校閉校式

平成 21 年 3 月 1 日（日曜日）11 時 20 分より同体育館にて福岡県立門司北高等学校閉校式が行なわれました。北橋健治北九州市市長挨拶から始まり、田中校長式辞、霜原門浪会会長挨拶、来賓挨拶と進み、クライマックスは体育館の左右の壇上に掲げられている門女の校旗と門司北高の校旗が最後の卒業生代表男女 4 名の手で降ろされ、綺麗に畳まれ、厳粛な雰囲気の中、厳かに、校長先生の手へ渡されました。感動、感激の一瞬でした。更に両校の校旗は卒業生寄贈の収納箱に重松先生と小田先生の手によって収められ一連のセレモニーは終了いたしました。尚、両校の校旗は門司学園中学校内に作られる門女、門司北メモリアルルームに保管される事になっております。

卒業生代表入江真司君の挨拶の中で「自分は教員になりたい」と将来の希望を語り、「門司北」の三文字を常に忘れず、心に刻んでおくとの言葉に、これで門女、門司北高が本当に閉校するんだなぁと寂しさと悔しさと時代の流れを禁じ得ませんでした。



生徒代表の手で降ろされる門女、門司北の校旗

4) 「門女、門司北白萩の宴」(感謝を込めて)

平成 21 年 3 月 1 日（日曜日）17 時より門司港ホテル「門女、門司北白萩の宴」(感謝を込めて)が行なわれました。明治 40 年門司市立高等女学校として開校しその後、福岡県立門司高等女学校を経て、福岡県立門司北高等学校と 3 度名称が変わりました。この間、数々の優秀な卒業生を世に輩出いたしました。そして平成 21 年 3 月 1 日、101 年の歴史を閉じることになりました。これまで並々ならぬご尽力くださいました P T A、門浪会、地域の方々、関係各位、学校職員への感謝と懐かしい思い出作りの宴となりました。これからも、門司北高はよき思い出として皆様の心の中にあり続けて行くものと信じております。特別表彰あり、卒業生でプロ声楽家、奥野まり子さんの独唱「白萩の思い」、小田先生の応援で校歌を合唱して涙々の終宴となりました。

尚、門司北高校の校舎は福岡県立門司学園中学校として、既に、新しい学園生活が始まっております。



乾杯 関東支部長 坂田氏



田中校長へ渡される校旗



木村先生特別表彰

5) 門司高等女学校、門司北高等学校記念室について

門司北高の閉校に伴い門女、門司北高の歴史と伝統を継承する記念品等を収蔵する記念室(メモリアルルーム)を設置する運びとなっております。設置場所は現門司学園中学校の保健室です。設置竣工予定日は平成21年3月27日です。

6) 校訓碑について

校訓碑は創立80周年の記念事業として生徒昇降口の前に設置されていましたが平成21年3月27日に校舎東門横に移設される事に成り

ました。又、80周年に寄贈した庭園内に北高最後の卒業生105名のタイムカプセルが埋められ10年後に全員が集まって取り出すことになっています。

7) 門浪会会則について

閉校により母校が消滅した為、会則を見直さなければなりません。案が出来次第次回の総会にて承認して頂く様にします。

次回、門浪会総会は平成21年10月3日(土曜日)に開催が決定しております。

多勢の参加を期待しております。

事務局 だより

1. 創立100周年記念誌 福岡県立門司北高等学校発行

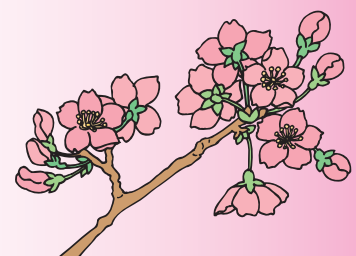
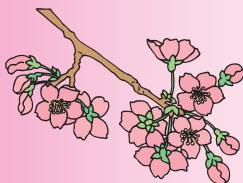
DVD添付ー3校舎(谷町、旭丘、猿喰)、門女・北高校歌、応援歌、100周年記念行事(バルセロナオリンピック柔道金メダリスト古賀稔彦の講演)外残り43冊 価格2,000円(送料無料)、購入希望者は事務局まで申し込みください。

2. 平成20年度門浪会会報会費入金状況……

平成21年3月31日現在588人の方に、振り込んで戴きましたことを厚くお礼申し上げます。

21年度も宜しくお願い致します。

尚、1,000名の振り込み会費を目標に今後も頑張ります。皆さんの御協力をよろしくお願い致します。



自然豊かなアフリカ大陸の 最高峰に立つ

後藤 禮子 (門女 37 期)

憧れのキリマンジャロへ (5896 m)

私が山歩きを始めたのは 53 歳。1999 年古希 (満 70 歳) を記念して、特別な技術の必要もなく素人が登れる世界で一番高い山、南アフリカのケニアとタンザニアの国境にあるキリマンジャロ (5896 m) 登頂を計画しました。憧れはあるけれど到底無理の一言に尽きると思いましたがせめて最終宿泊地キボハット (4703 m) 迄でもと考えて参加しました。国立公園の中にあるこの山に登るには登山手続きと入山料が義務づけられています。トレッキングの形式はガイド・ポーター・コックを雇って登山すること、総勢 12 名高所トレッキングの為の健康調査票と黄熱ワクチンを接種しなければなりません。1 月 8 日～1 月 19 日 (12 日間) 出発地福岡ー関西ーアムステルダムーキリマンジャロ空港迄 23 時間の飛行も希望と決心に胸が一杯で苦になりませんでした。

1 日目 登山開始

マランゲート (1700 m) で登山手続きをして出発です。ガイドさんの高山病への注意を胸にきざみ込む。体を冷やさず暖かくすること、水分を多めに摂取すること、アルコール禁止、ゆっくり歩くこと、健康の自己管理を十分に。当初は樹林帯。コケが大木から垂れ下がり鬱蒼と茂るジャングルの中のぬかるんだ道を進む。この道を雨に見舞われることもなく歩けるのは珍しいとの事。ゆっくり歩くこと 4 時間 20 分マンダラハット到着です。国立公園が提供するハット (小屋) はベットもマットレスも備え付けられています。ベットが高く跳び上がらねば…ヨーロッパ人を基準に作られたのでしょう。荷物整理終了後雨、夜中どしゃぶりの雨。1 時満天の星～星に手が届きそう…考えられない程美しい星の数と輝きは眺めているだけで疲れを、時を忘れさせてくれる。

2 日目 マンダラハット～ボロンボハットへ (2727 m～3720 m)

今日の行程は標高差 1000 m、所要時間 6～7 時間です。深い森を過ぎ花が咲く草原に出る。ポレポレはスワヒリ語でゆっくりゆっくりという意味。大きいアフリカの山をポーターを従えて殿様気分でもレポレ歩くと茫々と続くアフリカの自然が少しずつ見えてきます。

3 日目 高所順応日

マウエンジ峰方面にトレッキング、歩行中は今日も晴天。寒くもなく暑くもなし。背中の荷物もなし、快適です。ゼブラ・ロック 4000 m 付近を散策する丘の向こうに雪と氷河で白く輝くキリマンジャロが顔をだす。片言の英語でポーターと半分位しか通じない話をするのも楽しい。富士山のことをしきりに質問されるが上手に答えられないのは残念この上なし。富士山は眺める山の説に従ってまだ登っていませんでした。



4,200 m 附近 後方がキリマンジャロ

4 日目 ボロンボハット～キボハットへ (3720 m～4703 m)

草原帯をしばらく歩き「最後の水場シスト・ウォーターポイント」を過ぎると砂礫帯となる。前方にキリマンジャロがはっきり姿を現しました。あれが 6000 m に近い山なのかなと首を傾げたくなる。この付近は、平坦な砂漠になっており、登り下りの人々が交差し挨拶の言葉をそれぞれの国の言葉で交わすのも楽しみのひとつです。4200 m 附近になると、踏み出す足が重くなり寒い。延々と続く同じ風景にこの地の広大さを改めて認識させられる。最終宿泊地キボハット着 3 時。トイレに行くのもふらふら、食欲もない、何も出来ない状態です。



砂漠を歩く人々

5日目 山頂 ギルマンズポイントへ (5682 m)

起床 23:00 登山開始 24:00
山頂着 6:00 下山開始 6:30
キボハット着 9:15 朝食・荷造り出発 12:00
ボロンボハット着 3:00
本日の歩行時間 12時間～13時間

頑張ろう！何としても頑張ろう！そう思いながらストックを持ちました。ヘッドランプの明かりを頼りに砂礫の急斜面をゆっくり登ります。2時間後、頭痛嘔吐。メンバーに遅れることしばし。しかしガイドのトーマスは私の状態を充分キャッチして相応の歩きを進めてくれます。ポレポレ、ポレポレ…5300 m地点で粉雪が舞い始めました。

途中私の様子を見て適当な休憩場所を探して休めというトーマスと主人に守られて、ひたすら一步一步を進める私。一所懸命にジグザグに登る私たちの前に、3時間前遥か彼方を歩いていたメンバーの姿が見えました。軽い高山病が出たのでしょうか。途中でダウンしたのです。駄目だと思われていた私も殆ど同時に山頂に着きました。まだ真暗い山で全員無事登頂に、ただ喜び万歳！万歳！嬉しかった。そろそろ御来光です。日の出が足元よりもっと下から始まります。Mount マウエンジが雲間から姿を現し



山頂にて トーマス・禮子(筆者)・文夫・対尾

始めました。偉大な宇宙の夜明けです。今までの苦しさを忘れてただ感動の渦に包まれて過ごした20分余り…不可能が可能に。登山生活最高の幸せを5682 mの氷河の上で味わいま



夜明けのマウエンジ (前方の山)

た。グループの体力と下山の時間を考えて最高地点ウルフ行きを中止しました。残念でしたがガイドのこの処置は賢明だったと思います。グループ内8割登頂出来れば上々と言われている山です。下山を始めてその急斜面に驚きました。この道をよく登りましたと我ながら感心してみたり。もし、もう一日キボハットに宿泊(規則で許されない)できたらウルフ迄行くことが出来たと思います。キボハットで遅い朝食後、寝袋その他を片付けてボロンボハットまでの道のりの厳しく苦しかったことは忘れられません。4000 m～5000 mの高い所を12時間も歩いたのですから…。



山頂の氷河

今夜も星空です。お星様、私と一緒に喜んで下さいますか。もう古希ですよと小さくつぶやいてみました。同室の人達の幸せな寝息が小屋中を包んでいます。2日後、登山口に到着。登頂証明が授与されました。全員の晴れがましい顔。一人一人に直接手渡されました。感激の瞬間です。最後に、登山者・ガイド・ポーター・コック全員が輪になって楽しく歌った「キリマンジャロの歌」がまだ耳の奥に響いてきます。皆の心が一つになった苦しく楽しい山行でした。

祝賀劇「蒼下長唄勸進帳」に想う



関東支部長 坂田 満生（北高3期）

はじめに

昭和24年6月18日旧谷町校舎講堂で上演された、故蒼下朗然先生の演出による「長唄勸進帳」は、新制高校「門司北高等学校」の開校記念と「男女共学」を祝するBIG EVENTでありました。私は「創立百周年記念誌～門浪」の年表にこの記述がないことを残念に思います。そこで、幸いにも故蒼下朗然先生の著作「心にうつりゆくよしなしごと」が手許にありますので、その第4章「共学の祝賀劇長唄勸進帳」全文を、私の責任において「本誌」に掲載することを考えました。大方の諸兄姉のご了承をお願い申し上げます。

蒼下先生は昭和23年から昭和39年まで、旧門女・北高で教鞭を執り、国語科を担当され特に「源氏物語」はご自分の姓名の由来もあって、熱の入った授業でありました。更に従来の図書館を開架式に改めるべく、その整備開館に尽力され、全国図書館コンクールの福岡県下第1位を受賞されました。

さて、本年平成21年3月1日、門司北高等学校は閉校となり、旧門女時代を含め百余年の伝統ある歴史も閉じることとなります。私はこの機会に遠い昔の事ではありますが、門司北高等学校の開校の模様をふりかえるとともに、閉校の様子を静かに見守りたいと存じます。

共学の祝賀劇長唄勸進帳 故 蒼下朗然

昭和24年4月から、戦後の新しい教育制度に伴い、高校にも男女共学が実施されることに

成り、その門出を祝う記念行事が文化祭形式で行われることに決まり、演劇部としては通常の文化祭とは違った共学の祝賀劇に相応しい色彩を印象づけることが必要だと考え、その選定に難義しました。当時、文化部で演劇の係をさせられていた関係で、ここでもその責任を負わされる羽目になり、早速衆智を集め色々協議しましたが、決らず考えぬいた末、日本古典劇歌舞伎十八番長唄勸進帳を提案、他に名案がなかったのと、期日が切迫していたため即座に決定され、具体化することになりました。その頃の演劇部には古典劇の猛者が多く、2期生には岩崎・織島・岡崎・久礼・定敏・徳岡・中村・西山・元永、3期生では尾中・寒川・杉山・高橋・中里・滑川・松本・八谷・村上・横内・脇本などの達者が多く、それらの父兄にこれまた大変なマニアがおられ、長唄勸進帳のLPレコードを貸すからやってみろという強力な応援を得て、その準備に取りかかることにしましたが、反面、GHQやCIEに遠慮され、これを危惧する人もあったようでしたが、多くの父兄の援助によ



りOKとなり、5月初め頃から練習稽古にかかり、台詞の言い廻し、仕種や表現の所作などはちょっとやそつとで出来るような、なまやさしいものではないので、先ず、配役を決めて各自がその役に専念し、台詞やいいぐさはレコードで覚え、所作は古老を訪ね、衣裳は各自で調達してやっと6月18日の上演に間に合わせる事が出来ました。

開演前に大切な口上は2期生に定敏美奈子という大ベテランがいて彼女に一任、彼女の一家は歌舞伎に造詣の深い方々だったので、普段の感化が大きくお陰で大成功。当時、毎日新聞系の地方紙、新九州新聞社のカメラマンがつきつきりで撮影、翌日の新聞に大々的に報道され、一同面目を施したことでした。今写真で拝見しますと、主なる配役は次の通りのように思います。

開幕口上	2期生	定敏美奈子
武蔵坊弁慶	2期生	元永 英子
源 義経	3期生	横内 邦彦
富樫左エ門	3期生	脇本 暎子

この劇は歌舞伎狂言十八番中、最も人気の高いもので、古来祝賀劇の筆頭にあげられております。その練りあげられた舞台には常に緊張があり、息を抜くところは一つもないといわれているものです。

この劇のみどころは、関守の富樫から「一人も通すことまかりならぬ」といわれて、弁慶が「いでいで最後の勤めをなさむ」と一行の祈りをする祝詞の場面がヤマで、弁慶がありあわせの巻物を歓進帳に見せかけて読み上げたり、富樫の山伏に関する突っ込んだ質問に弁慶が立板に水を流すように、すらすら答えたりする所謂「山伏問答」が2人の対決のクライマックスといえるところであり、義経が番卒に見咎められたため、腕ずくで通り抜けようとする四天王の面々を抑えようと必死でふんばる弁慶の所作の



箇所は、観客から拍手を受けるところであり、更に義経を金剛杖で打つ弁慶を見て胸をうたれ、遂に一行を見逃す決心をする富樫の演技も感激させられるところであって、涙をさそわれそうになるところです。こうして関所を無事に通過した後、義経が弁慶の手を取って労わりの言葉をかけるあたりは、しっとりとした長唄の調子と相まって感動を呼ぶところですが、彼らの後を追って、失礼の詫びに来た富樫の酒のもてなしを受け、弁慶は大きな器で豪快に飲み干し、得意の延年の舞を披露した後、あの勇壮な「飛六方」で、先に行かせた一行のあとを追う終盤は弁慶の一人舞台となるところで、爽やかな気分させられます。

以上がめでたしめでたしの「歓進帳」のすぐれたところで、男女共学の門出を祝うに相応しいものであったと、すべての観劇の人達から絶賛を受け、激賞を博したので、出演者一同は大満足でした。



「恩師と当時の猛者たち」

あとがき

教育新制度による門司北高等学校と男女共学はこの文章にあるように、このようにして始まりました。戦後の新制度に戸惑いながらも校内は活気に溢れていました。当時、街には「青い山脈」の歌が流れ、社会は戦争の暗さから徐々に平和の明るさを取りもどしつつありました。高校生活も明るさが増していました。が、しかし私たち若者にとりましては「腹を空かせ」「ひもじい」思いをさせられた時代でもありました。

私は北高卒業後大阪・東京・テレビなどで歌舞伎を観る機会がありましたが、あのとき北高で見た祝賀劇が機縁になっていると、いつも考え思い出しておりました。

今では、あの祝賀劇は蒼下先生始め当時の先生方の「古典に親しみなさい」「日本人の心を理解しなさい」と言う、私ども生徒へのメッセージであったと理解しております。



「蒼下先生と二・三期生」

2期生の今関信子氏（旧姓久礼）は当時をふり返り、「男女共学を祝う文化祭での歌舞伎十八番長唄進帳の舞台で初体験の台詞の言い回しや表現の所作など、真似事の高校生役者に過ぎなかったと今にして恥じるが、一つの事業を成し遂げるスタッフとキャストの結束をこの時代に培ったと自認している」と述べておられます。～会報創刊号より～私はこの言葉「一つの事業を成し遂げるにはスタッフとキャストは如何にあるべきか」「この時培った」と言う言葉に感動を覚えました。素晴らしいと思います。



天国の蒼下先生はさぞかし大喜びだろうと思っています。

この「祝賀劇」が上演されてから、早や六十余年の歳月が流れました。かつての紅顔の美男美女も今や後期高齢者の年齢に達しました。この劇の関係者一観劇された方々を含め一の中にはすでに複数名の方々が物故者になられております。ここに物故者の方々には心からご冥福を祈念申し上げます。又、生存者の方々には若き日の輝きを、これからもずっと持ち続けて欲しいと存じます。

以上

百年の歩み尊く平成の新しい
「変」に明日を託さむ

北2期 今関信子



門司港駅／穴吹哲二郎

平成 20 年度 関東支部総会と所感

安藤 秀樹 (北高 12 期)



「天気晴朗ナレド門浪高シ、北高 12 期ノ興廢コノ一戦ニ在リ。各員一層奮励努力セヨ」。時^{とき}に平成 19 年 6 月 21 日 13:00 (時) でありました。

唐突ですが、これは総会の当番幹事として、10 期の方々から我が 12 期が引きつぐべく打合せに臨んだ時の心境です。ところが当日は天気晴朗どころか初夏の蒸し暑さは格別で、しかも何をどうして良いのやら皆目見当もつかない状態でした。しかしなんとか大まかな内容と方向性をまとめることができ、この日が事実上の総会準備のスタートとなりました。まずは日時と場所の設定が最優先しますので、各所を比較検討し認知度、交通利便性、内容、コストパフォーマンス等…結果、この時点では「帝国ホテル」が良いと即決し交渉に入りました。6 月 27 日に仮契約を結び、開催日は平成 20 年 6 月 21 日とし、奇しくも準備スタートの月日と一致し、なにか先行き縁起がいいなと勝手に思ったものです。

ところで、私はたまに北九州に行く機会がありその時には、関門の「門浪」が懐かしく門司港周辺を歩くことにしています。歩きながらこの海峡にまつわる歴史とか人々の様々な関わりや営みとかを、柄にもなく考えたりしますがそういうこととはほとんど無縁の様に、潮は滔々^{とうとう}と流れ、風はさやかに吹き亘り、拡がる景観は相変わらず素晴らしいものです。

音をたてて奔騰する潮流、そして潮の香りが五感を一気に覚醒させ、変らぬあの懐かしい爽快感に全身が包み込まれる様です。

眼前には大きな関門橋、そして近年開発整備された建造物群がありますが、私にとってはそ

れらはなんとも言えず違和感を覚えるものでした。しかし、今では関門の豊かな自然が、これらを自らの造型の一部としてゆったりと包みこんでしまっている様な感じがします。何事もなく昔からずっと存在していたかの様な佇まいを見るにつけ、なんとなくホッとした気持ちになります。小・中学校そして北高校と、こけつまろびつ駆け抜けたあの懐かしい日々が思い起こされ、この地で過ごせたのは本当に幸せなことだと実感できるひと時です。近年、その小・中学校は消え、北高も来年 3 月には閉校とのこと……「世の中にある人と栖^{すみか}と、またかくのごとし」と、時の流れの無常さを感じます。

閑話休題、総会の話に戻ります。

日時と場所を決め更に具体的な計画をたて準備を着々と進めていました。ところが 7 月下旬に支部全体の体制と運営について改編があり、支部長はじめ運営委員が交代する事となりました。従って総会の進行プログラムは、新しい体制・運営・関連事項についての説明と紹介に例年になく多くの時間が割かれる事となりました。

さて、案内状を送付し出席状況が非常に気になるところでしたが 5 月下旬には 60 名見込みのところ 80～90 名近くまで増え、このうれしい誤算に大いにあわてました。直ちにホテル側と交渉し「牡丹の間」から、はるかにゆとりのある「光の間」に変更することができました。これは僥倖^{ぎょうこう}という以外なにものでもない事だと今でも思っています。

総会当日は天候の心配もあり出足が気になりましたが、出席予定者 97 名に対し出席者は 96 名で、とりあえず胸をなでおろしたものです。総会におきましては、至らないところ不手際な点もありましたがなんとか全て予定どおり進捗し終了することができました。総会内容で特に記しておきたい事項は以下のとおりです。

- 1、坂田支部長の新任挨拶
- 2、吉村前支部長へ感謝状と花束を贈呈。

永年に亘るご尽力とご厚情に対し、坂田支部長より感謝状を、門女 35 期清

井様より花束をそれぞれ贈呈。

- 3、北高田中校長挨拶。
- 4、霜原会長は欠席の為、高橋支部長が挨拶の手紙を代読。
- 5、乾杯は北高応援歌の作詞者である同3期の高橋様のご発声。
- 6、坂田支部長より支部新運営委員の紹介。
- 7、門女2期平木様より椿句会を改めて紹介。
- 8、坂田支部長より門浪会会報創刊号への支部の寄稿者の紹介と各々の挨拶。
- 9、来年度総会当番幹事の北高13期の紹介と代表桑子様挨拶。

今回は二次会の企画はしませんでした。各年次、各グループの方々の要望もあり場所（店）の紹介のみさせていただきました。

帝国ホテルに隣接する大和生命ビル地階のレストランですが、この場所には明治の世、

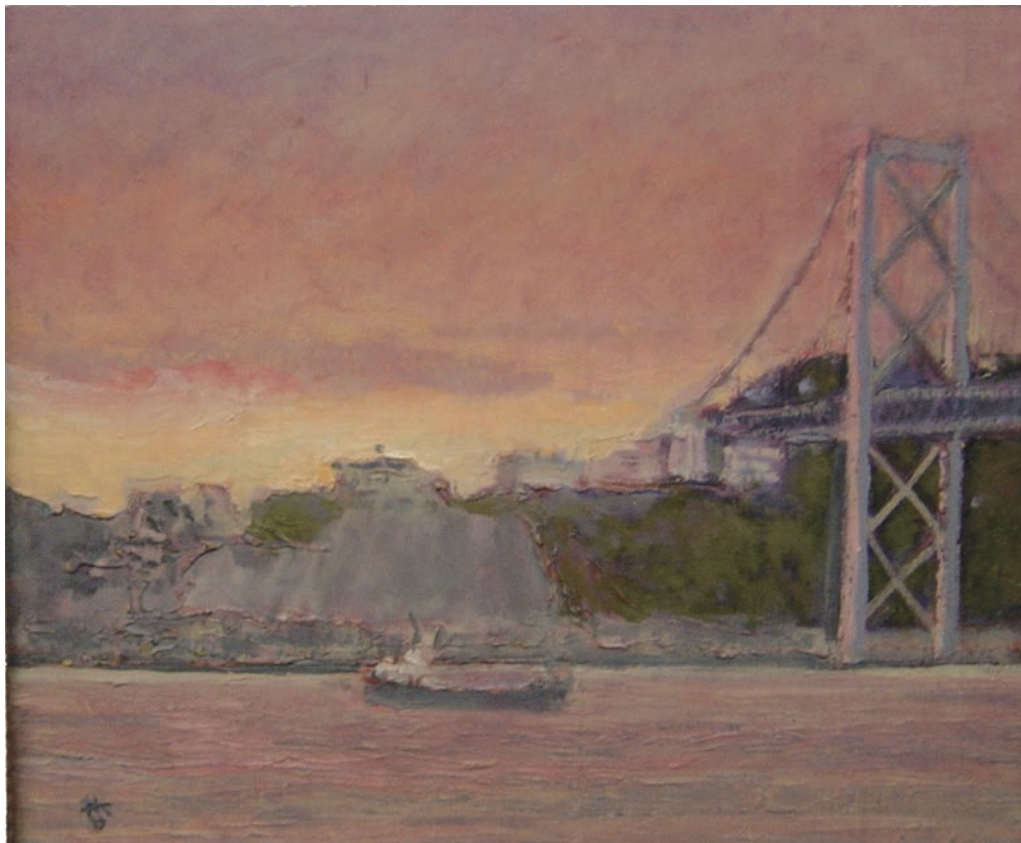
鹿鳴館があったとのこと。

この原稿を認めている今は12月中旬で総会はまだ半年前の事となりました。総会が特に支障もなく全うできましたのは、ご出席いただきました方々はもちろん、関わっていただいた全ての方々のおかげ様だと思っております。特に嬉しかったのは同期12期の諸君が真剣に参画してくれた事。前年幹事の10期の方々に何かとお気遣いいただいた事。帝国ホテルの現場の方々が折目正しく、どんな状況にも迅速適確に対応してくれた事。等々、全ての方々に感謝するのみです。誠にありがとうございました。

来年も又、皆様方にお会いできる日を楽しみにしております。

「時は過ぎてゆく。けれど巡るもの。」

平成20年12月吉日 記



関門橋／穴吹哲二郎

門浪会総会を終えて

高橋 久俊（北高3期）



昨年の8月に金光先生より「創立祝賀会で応援歌を作詞した君を紹介したい」とのお誘いがある「門女北高創立百周年祝賀会及び門浪会総会」に出席して来ました。

祝賀会終了後に「3期世話人」の呼びかけで、門司倶楽部に金光先生の御出席を頂き、是が最後の集まりになるのではと、昔日の紅顔の美少年・美少女が参集致しました。

総会の前日、同期の秋葉節子さんと田ノ浦の公事先生のお宅に参上し、先生の御仏壇に線香を上げさせて貰いました。奥様にお会いし門浪会で門女と北高の橋渡しに御尽力下さった先生との懐旧談に花を咲かせて来ました。

私達が入学した北高校は2年・3年の先輩は門女の女性ばかりで、1年生は男女共学で、私達とさほど年齢の開きの無い金光先生・公事先生・箕田先生・蒼下先生は生意気盛りの私達に私達と同じ目線で相対して頂き情熱を傾けて教鞭をとって居られましたし、卒業後もご指導を頂きました。当時の北高校の名物教師ライオン（保健・生活指導の松永先生）の授業は分厚い専門書を片手に読み上げられる授業で「ノートをとれ」との声で一斉に記述を始めるのですが、ある日読み上げられる中に「雨は天から降る」「なに？」と、記述を止め笑いたかったのですが雷が落ちそうなので笑いを噛み殺して記述を続けたものでした。

3年生の卒業式は講堂が狭いと云う理由で1年生は出席出来ず、門女の先輩だけで門女の校歌を歌っての卒業式だったと聞いていました。翌年運動会が迫って来たある日、有志が応援歌が無いのは寂しい、国体の「若い力」を歌おうと男ばかりで練習をしました。

3年の時に生徒会が「応援歌の募集」をしたので、大学進学のための受験勉強の合間をみて応募することにしました。旺文社の受験雑誌蛭雪時代の中に「再び繰り返す事の出来ない青春に悔いを残さないように」との文言が有り何かを残したいと勇気づけられ応募を決意したのです。当時の私は悩み多き時を送って居て孤独を愛し、谷町の校舎で体育館や狭い運動場の見える丘で「安部次郎著三太郎日記」「赤木健介著人生論」などを読み耽っていました。時々風師山に登ったり和布刈神社から潮の流れに逆らって航行する関門海峡の船舶を倦かず眺めて居る時に、頭の中で文言が出来上がり、卒業の翌年に入選の知らせがあり在籍中の弟が生徒会より感謝状と万年筆を貰ってきました。万年筆は使用せずに大切に保管していたのですが、管理が悪かったのか先日見ましたら腐食が激しく破棄しました。

40年前に松本支部長・門女出身の先輩方に対して「後輩が入会しなければ会は尻すばみで消滅しますよ」と云ったのに今回の祝賀会で田中校長先生が挨拶の中で「今高校には3年と2年で1年生は居ないのです。北高校卒業は60期生が最後となります」と挨拶されました。不思議な因縁で後に続く後輩が居ない事は時の流れとはいえ誠に残念なことです。

総会の翌日は谷町の懐かしい強者どもが夢の校舎跡、川上・公事先生が谷町校舎の移転先を調査された旭町の校舎跡地など彷徨い歩きました。投宿した「ルートイン門司」の最上階の展望風呂は余人が居なくて、電飾に輝く関門大橋を眺めながら行き交う船舶を見て居ると、来し方が走馬灯の様に追想され、青春の幕が下り門司北高校も2年先には無くなり、私の作詞した「北高応援歌」も歌われなくなるんだと思うと侘しくて無性に涙が出てきました。「母校の益々の発展を祈ります」の声もない、幕引きの祝賀会・総会だったなど、何かやりきれない淋しさを感じました。

ドイツ駐在雑感

安藤 修一 (北高8期)



門司港で育った子供の頃、よくアカ(銅)やガラスを拾っては換金し、稲荷座あたりで西部劇を見たものだった。その頃からいつかアメリカへ行って本物

を見たいとの憧れを持っていたが、20代30代とそのチャンスは来なかった。ところが40代の半ばの'85年頃、会社が突然アメリカに工場進出するという。南部のアトランタ近郊の「風と共に去りぬ」で有名なマディソンという田舎町だったが、これを逃してはならじと手を挙げて進出プロジェクトに参加、工場建設や機材の調達で何度も米国中を回った。出張ベースだから気楽なもので楽しいことばかり、また円高ドル安進行のなか大幅に現地調達を増やし成果も上がり、評価ももらうことになった。米国が一段落した'88年頃、今度は欧州での貿易摩擦が激化、高率関税回避の為ドイツに工場進出して現地生産をするという。「行くならアメリカの方か」と思ったが、「ドイツに行って、工場を建て早急に現地生産をやれ」との事で、図らずも定年まで足掛け11年に及ぶドイツ駐在が始まることになった。

オランダ国境に近いドイツの町で、会社設立、工場用地、建物、従業員の採用、訓練、生産立ち上げと汗をかいたが、社内や地元の期待の中、かなり張り切っていた。

一人当たりGDPは日本とほぼ同じレベルだが、労働時間はドイツの方が2割ほど少なく、今、製造業では週35時間労働が定着している。そんな国では時間をロスしたら取り返しがない。工場は常に高い効率を維持してないとやっていけないことを身にしみて感じたものだ。スーパー等の営業時間も短く、日曜は休みで平日は夕方6時までだが、閉店5分前などに

入ると嫌な顔をされる。全てを片付けて鍵を閉めるのが6時だからだ。ドイツ人に「不便だ」と言うと、いくら長く開けていてもサイフの中身以上は買わないだろうと割り切っている。これも高効率の一面かと思った。

アウトバーンは無料で縦横に通っているので片道200kmぐらい迄の出張は車で簡単に行け、非常に便利だった。普通160km/hで走っているところへ、ペーパードライバーが行って、いきなり的高速運転だったから、半年ぐらいは手に汗をかきながらの運転だった。

操業開始後、間もなく会社に組合ができて、創立大会にゲストで呼ばれて出席した。

一連の議事が終わった後、折角だから質問していいかと言う。OKと言ったら若い女性作業者が「ハイ、ハイ、ハイ」と次から次へと手を挙げて質問を始めた。まるで吊るし上げみたいになったが冗談で皆をドッと笑わせたり、話がうまいのに驚いた。ある外交官に聞いた話だが、日本では幼稚園の時から、「大きな声でハイと言いましょ」「みんな仲良く」と言われて大きくなり、次第に「イエスマン」になるが、ドイツでは「ノーと言いなさい」と言って育てるという。つまり「ノー」と言わせ「いや私はこう思う」と自分の意見を言わせる訓練を子供の時からやっているという。個人主義の中には自分の事は自分で弁護し守るという意味もあるのだ。仕事でミスをしてしても決して謝らず、懸命に弁解をする。「スミマセン」と謝れば許される社会と罰せられる社会との違いを実感したものだ。雇用は完全に実力主義だが、また自分の力の市場価値もよく知っていて、より高い地位と待遇を求めて、やる気のある人ほど、どんどん移っていく。そんな訳で年中、採用活動をやっていた。

また不都合なことをした者にはその度に警告書(イエローペーパー)を渡して注意する。3度目は解雇通告(レッドペーパー)でサッカーと同じだなと思ったが、ルール違反者にはそれなりに対処するのが全体としてはフェアなのだ。いろんな文化の違いもあったが、5年ぐら

いは順調に操業が出来た。しかし日本と同じでソ連の崩壊で共産国が市場経済に組み込まれるとえらいことになってきた。何しろ給料が1/5程度の東欧が高速道路で数時間で結ばれたため、現地企業の工場が次々と逃げ出し始めた。また中国等の安価製品の輸入も増加、次第にやって行けなくなった。日本側は「駄目なら閉めて帰って来い」だ。「何とか欧州工場を続けさせよう」とドイツ人の工場長と毎週のように冬のハンガリー、ポーランド、チェコと外注工場探しで走り回った。「あの森の向こうはもうウクライナだ」と聞いたときはさすがに「ここまでやるか」と思ったが幸いチェコに適当な工場を見つけた。上部団体の反対デモに囲まれながら、ドイツではリストラを、チェコでは立ち上げを繰り返し、生産の全てを移管しドイツからのコントロールにした。足掛け11年の滞在だったが結局、ドイツ生産は8年、チェコが8年、計16年で欧州生産は終わり、その後中国に移った。日本でも工場が次々と出て行くなど経済のグローバル化は止まらない。

駐在の後半、販売会社と一体化したので今も会社は残っている。

幸い苦楽を共にしたドイツ人工場長がその

後、社長を引き継ぎ、今も、毎年出張中にワインをぶら下げてやって来る。2人で昔話をしながらビアホールで飲むビールはいつも格別である。

仕事では汗のかきっぱなしだったが、夏休みなどは家族を呼び寄せポルトガル、スペイン、フランス、スイスなど欧州各地を回ったのも楽しい思い出。また週末は料金も安く、空いているのでゴルフを好きなだけやれたのも、息抜きになった。ハンデが5だったと思うが、荒谷さんという日系企業の代表がいて、何度も一緒にプレーした。どこか似ているなと思っていたが、間もなく帰国すると言うので尋ねたところ門司北高時代、大変お世話になった英語の荒谷先生の息子さんで1年まで北高にいた先輩だった。

「もっと早く知っていたら、お父さんも喜んだでしょうに」と奥さんに言われたが遅かった。駐在中はいろんな事を学んだが仕事だけの人生ではなく、ゆったりしたドイツ人の生き方だった。どういうわけかドイツ時代に知り合った仲間は今も仲がよく、十数人で毎月のようにゴルフ会、飲み会を続けている。まだまだ楽しい付き合いが続きそうだ。



漂／小島 敬三郎

終の棲家とふるさと創り

大空 智明 (北高 13 期)



つい先日、こんな会話を。「うちの主人は定年になってから、どこかに行くわけでもなし、テレビの前でゴロン、よ。このままではボケちゃう」。で、あなたは？と聞いて驚いた。昨年秋、女友達と 2 人で北アルプスの槍ヶ岳に行ってきたと。今は毎朝ウォーキング 1 時間。話の中で推察すると 60 代前半か。歳を重ねるほどに男はしおれ、女性は輝く、という定年男の悲惨な実態をかいま見た。

さて自分は？と現実を考える前に、まず来し方を振り返ると――。

少年時代は長州で生まれ育ち。学校が終われば一目散にハゼやウナギ捕り。山では自然薯掘りにマツタケ探し。食べる物がなくお腹に入るものなら何でも、という時代だったが、今考えてみれば最高級品を口にしていたのだ。

門司港時代の中 3 から北高 3 年間はまさに青春真っ盛り。転校生で山口弁丸出し。言葉が通じず、半べその自分に代わって通訳してくれた友の笑顔。生物部では蝶々を追い、久住山、大山、石鎚山などを走り回ったこと。そしてふるさとの英雄・高杉晋作への関心。

東京時代は仕事々々で全国を飛び回り、いつの間にやら子供が男ばかり 3 人、孫 5 人。少年時代と門司港時代がいずれも居住 13 年前後だったため 40 歳頃には九州に帰るのかなあーとおぼろげに思っていた。だが、今や東京都日野市は子供にとっては生まれ育った故郷。自分は定年後も住むことになり、終の棲家とハラをくくる人生になってしまった。

こうなるとテレビを相手にボーッとするわけにもいくまい。我が棲家を良き所と誇れるようにするか、嫌な所としか顰め面を隠したまま過ごす

か。そのカギを握るのは我が心。心の有り様で周りを楽土にも苦海にも感じてしまうからだ。

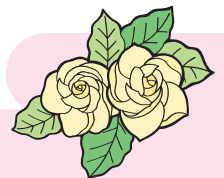
丁度そのころ市が「ひの市民大学」を立ち上げ、広報で参加者を募ったことから一期生として参加。市民が聴きたい講座を企画し、講師を捜して、当日の司会・進行までする、ということに首を突っ込んで 7 年。その結果、長年住んでいたとはいえ地元について余りにも知らず、素晴らしさが沢山あることに開眼した。

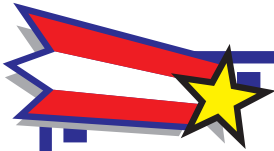
自然豊かな多摩動物園があり、街の中央には多摩川の支流・浅川が流れ、綺麗なせせらぎと桜並木がある。水辺には“空飛ぶ宝石”といわれるカワセミが美しい空色の背や腰を艶やかに見せて、サッと飛び去る。川の中に目をやると一昨年からアユが遡上し始めた。NHK のドキュメントで「多摩川に天然アユ百万尾のぼる」が数年前に放映されたほどだ。

歴史に名を残した人物は？と図書館へ行くと、グッと迫ってきたのが新撰組副長の土方歳三（ひじかたとしぞう）。高杉晋作とは政治的に対極にあるが、調べるほどに二人の生き様に共通項が見えてきた。それは、自分に決めたことは徹して貫く、というぶれない生き方だ。言わば「西の晋作・東の歳三」とでもいうべき存在である。終の棲家という意識で地域に目を注ぐと、驚きと感動は次々に出てくるように思う。このことは全国どこでも同じではないだろうか。

可愛い孫も大きくなり、人生を振り返る晩年を迎えた時、秋の紅葉に彩られた山々のごとく、荘厳な充実感に浸れるような自分でありたい。そのためには同窓の友との絆を大切に、新たなふるさとの思い出創りに挑まねば。

「門浪会会報」創刊号に登場された“甲州街道の旅”の先輩達のように。





会報がアメリカ議会図書館に所蔵されることを願います。

坂田満生（北高3期）

会報創刊号は3期の平田博氏を通してアメリカ議会図書館に勤務する、2期の菅井則子氏（旧姓織島）にお送りし、私たち門浪会の活動を理解して頂くと共に、同図書館に「会報」が所蔵される事をお願い致しました。今後、発行される「会報」も所蔵をお願いしたいと考えております。

この会報が縁となって、門女35期の清井早苗さまは平成20年10月、同図書館に菅井則子さまを訪ね歓談されました。ご両人とも、大変楽しいひと時でした、と申しておりました。誠に嬉しい事です。下記はその時の写真です。

平成21年1月7日

以上



議会図書館の菅井さん



清井さんと菅井さん



「会報創刊号」を手にする菅井さん

関西支部

門浪会関西支部総会、並びに今後の支部の在り方に係る総会決議について



関西支部長 吉本雅文（北高9期）

平成20年度の門浪会関西支部総会は9月20日、明石海峡を見おろす景勝の地、柏山に建造されました有栖川宮ご別邸跡としての由来で親しまれている「シーサイドホテル舞子ビラ神戸」において開催されました。

総会は霜原門浪会会長、田中北高校長先生をお迎えし、門女12名、北高29名の総勢43名と近年にない多数の参加者のもとに行なわれました。



「シーサイドホテル舞子ビラ神戸」にて

式次第に従い、第1部総会を進めましたが、最初に私の挨拶のなかで来年3月で「福岡県立門司北高等学校」の校名が無くなる（閉校）のに合わせて「門浪会関西支部」も、その在り方を考える一環として、支部の存続を問うアンケートを全会員の皆様に求めておりましたので、その結果を本総会の場で発表させていただき、御討議・検討をしていただきたい旨お願いしました。

御来賓挨拶のなかで、霜原会長さんからは何等かの形で関西支部の存続を願いたい旨のお願いと、総会前日に会場近くを散策された折の知見の一つとして明石城の歴史について、関西に住む私達も知らないことについてのご教示をい

ただきました。

田中校長先生からは北高生徒の文・体育系に亘る活躍状況、就職動向など現状のご報告を嬉しくも頼もしくお聞かせいただきました。議事にうつり、18、19年度決算報告と、会計監査結果報告が拍手でもって承認されました。第3議題の門浪会関西支部のこれからについては、結論として「支部解散も止むなし」となりました。経過につきましては、後ほど述べることにします。議事終了後、明石大橋を眼の前に、明石海峡を眼下にした庭園で写真撮影を行ない、次いで懇親会へうつり、賑やかに懇談、食事へと進みました。本懇親会のイベントは2件企画されており、先ず一つ目は北高10期生、草野（旧姓、青山）さんを中心に、同じダンシングクラブでフラ踊りを習っておられます麗人2名の特別参加を得まして、手振り、腰振りの意味、解説を交えながらの『フラダンスショー』。ハワイアンムード溢れるいい雰囲気でも盛り上がり、踊りの終わりには門女32期のお姉様方（80歳半ばとのこと）も舞台上がり踊り嬢と記念撮影をしていました。若返ってのよい記念になったことでしょう。



「フラダンスショー」

次は、『フルートの調べ』と題しまして、関西を中心にフルート奏者としてご活躍されておられます長谷川ゆかり先生（北高9期生、山越ヒデ子さんのリコーダーの先生）の演奏で懐かしい歌を合唱したり、心にしみるフルートの音色に心酔するひと時を過ごさせていただきました。



長谷川ゆかり先生による「フルートの調べ」

斯くして、総会議決による「支部解散も止むなし」という現実を見据え、思い出として残る、門司北高等学校存在の下での最後の門浪会関西支部総会を閉会しました。

さて、門浪会関西支部のこれから…について（総会議事第3議題）です。

門浪会関西支部は、総会開催回数から逆算して、昭和36年に設立（初代支部長、第3期生、故柴田秋介氏）以来、門女・北高3期の方々の世話により約半世紀という長期に亘り関西支部会員相互の親睦を図って参りました。この間、平成9年には支部の会報誌『モンロー・ウォーク』が発刊され、支部の活性化につながり更なる発展が期待されました。しかし、会員の高齢化や若年層の入会もなく、総会参加者も減少の一途を辿りました。しかも、近年の総会出席者は毎年同じ顔触れ。3人に1人は役員といった状況が続いています。

支部役員も高齢化や健康上の理由等から、辞退の申し出が続発しており、後任のなり手もなく、ここ数年は規約に定める年度毎の当番幹事による総会運営もできず、数人の役員により細々と開催しているのが現状です。この様な状況下では本来の同窓会としての役割は勿論、会の運営・存続も危惧され、各同期会を通じたり、

総会案内状等でも積極的な参加を訴え続けて参りましたが、一向に好転の兆しも無く、悶々とした年月を過ごしてきました。来年3月に北高が閉校となるこの時期を支部の在り方を見据える好機と捉え、関西支部の存続か、廃止（解散）か、について全会員の意向を確かめることを目的にアンケートを採ることを、本年6月の役員会で決定しました。アンケートの実施は今次総会の案内状発送と同時に行ないました。

その集約結果は次の通りです。

アンケート発送数	460通（全会員）
同右 回答数	203通（44.1%）
存続希望	18名（* 8.9%）
解散止むなし	179名（*88.2%）
意見表示なし	6名（* 3.0%）

（* 回答数基準百分率で示す）

総会の場でこの結果を報告し、討議すべく意見を求めましたが、全く意見もなく、アンケート集約結果から「解散止むなし」で挙手を求めたところ全員の賛同を得ましたので、本年で関西支部は「解散止むなし」と決しました。以上が解散決定に至った顛末です。しかし、現在の役員としても、このまま解散ということは非常に残念でならず、代案を提示しました。

その1つは、支部総会は今回が最後の開催となるが、来年は『解散パーティー』を行なう案です。支部決算残高も見込める様子ですので、その残金を貰い、参加者無料でしめやかなかにも賑々しく実施しようというものです。

2つめは、今までの総会のようなものでなく『仲よし会』的なもので、『年に一度は同窓の人々と会って門司の話や昔懐かしい話、近況談話に花を咲かせよう』という趣旨です。加えて、『門浪会本部』との関係は今後共維持することとし、機が熟した暁には何時でも支部復活を可能な土壌を保ち続けようとするものです。

会の名前は霜原会長さんとも相談し『門浪会関西同好会』（案）としており、同好会発足時に正式決定したいと思っています。

同好会の運営は次の様に考えています。

- 1、会への参加は自由
- 2、会実施の連絡・案内が必要な方は、通信費として千円（往復葉書10枚分）を負担。連絡不要な方でも参加してみようという方

は当番幹事に連絡の上参加出来ます。

- 3、年会費は不要
- 4、会合費用は当日の会飲食代のみ個人負担
- 5、当番幹事は北高9期、10期、11期生が交代で担当する。
- 6、開催は年1回とし、春又は秋に幹事が設定する。
- 7、会長は暫定的に私（吉本）が引き受けます。

この2つの提案につきましても、総会出席者全員から拍手でもって賛同の意を示していただきました。霜原会長さんからも同意を得ました。又、田中校長先生からも、「来年の解散パーティーには、ぜひ招待してください」との要望

もありました。

これまで通りの関西支部としての総会がベターではありますが、時の推移には逆らえず、このような結末となりました。

これからは、支部は無くなりますが、門浪会の活動、運営に少しでも関与できる方法で関西支部は変身していくこととします。

門浪会本部の温かい見まもりを頂ければこれに勝る幸せはありません。

今後共、何卒一層の御指導・御鞭撻の程、宜しくお願いしまして本文を終わります。

門司港の老舗

岩田商店の建物と そこに住んだ思い出①

岩田 昶（北高9期）



はじめに

平成14年11月初旬、京都の白石洵君から、10月に箱根・湯河原で行った門司北高第9期生の親睦会の写真と手紙が届きました。

その手紙の中に、門浪会関西支部の機関紙「モンロー・ウォーク」に掲載したいので、「大正時代の文化財」とかいう題で、私の生まれ育った、岩田商店のことを書いて欲しい、との依頼が書かれていました。

それというのが、箱根の旅館で、白石君と同部屋になり、私が2枚の古い写真のコピーを彼に見せたことがそもそもの発端です。

その写真は、岩田商店を正面からと側面から撮ったA4くらいの大きさです。現在の関門国道トンネル車道口へ通じる道路が、まだ堀川という川で、流れている水が映っています。そして、南側には、昭和初期に消失した旭座という演芸館まで見ることができます。従って、時代

は大正末期か昭和初期のものと推測されます。

なぜ、私がそんな写真を持っていたかを申しますと、親睦会解散後、私が鎌倉の妹宅を訪ねる予定でしたので、彼女に渡すためでした。

旅行の直前に、岩田商店の物置から数十枚の古い写真が出てきました。私もそれまでに見たこともないものでしたから、その中から、2枚だけコピーしたのです。私が同室の仲間に写真の説明をし、古い門司のことを語り合ったのです。

さて、白石君から依頼がありましたものの、引き受けるかどうかしばらく迷いました。

市が、文化財としては買い取ってまで保存しないことを明らかにした、個人の建物のことを、機関紙に載せて、読む人は不愉快になるのではないだろうか、と思ったからです。



正面から見た岩田商店

しかし書いてみようという気になったのは、つぎのような理由からです。

門司港に住んだことのある人なら、戦災から奇跡的に焼失を免れた岩田商店の、あの古い建物を、誰もが知ってくれていると思ったからです。

銀映、新世界、テアトル金星などの映画館に行ったことのある人なら、岩田商店の前を歩き来したはずですよ。西と北に赤煉瓦を巡らし、見るからに古めかしく、壁は黒色で、2階の窓には泥棒よけの黒い格子をはめ込み、外からみれば、さながら牢屋敷のような特異な建物ですから、誰もが記憶にあると思ったからです。

それに、そこで生まれ育った私の母、叔母（母の妹）の2人も門女出身、私の姉、妹2人、弟の5人きょうだい全員が北高を卒業しており、合わせて8人も門浪会の会員です。

母	岩田	豊子	門女18期	昭和31年1月没
叔母	岩田	温子	門女27期	昭和20年7月没
叔母	岩田	紀子	門女30期	昭和52年2月没
姉	尾本	玲子	北高5期	愛知県東海市在住
妹	渡辺	尚美	北高11期	神奈川県鎌倉市在住
弟	林	岳	北高12期	神奈川県相模原市在住
妹	久保	朱美	北高14期	千葉県若葉区在住

そして今、あの建物が、保存するか、売り渡して壊されてしまうかの瀬戸際にたっているのです。この時期に、古い門司港のことを、あの岩田商店の建物の歴史や、そこに住んだ私の家族の思い出をからめて書いてみるのも面白かろうと勝手に判断しました。

不思議なことに、この原稿を書こうと思いついたら、忘れていた昔のことを次から次に思い出してきたのです。



正面から見た岩田商店

祖父や祖母父や母、伯父や叔父・叔母から聞いたことで断片的に残っている遠い記憶を探り、それと私の姉妹弟、従弟妹が知っていることを、なんとか繋ぎ合わせ、岩田商店のあの建物が、周囲の様子がすっかり変わったのに、なぜ今日まで昔と同じ佇まいを見せているかを披露していきたいと存じます。あわせて、門司（主として門司港）の今昔について私の感ずるところを、思い出をからめて語らせていただきます。

それも、時系列とおりにはいかず、あっちへ飛び、こっちへ飛んでしまうかも知れませんが、また、重複したり、思い違いがあったりするかもしれません。また、身内への思い出話に多少触れざるを得ないことを、ご容赦願います。

ときには昔を振り返り、消え去ったものへ愛惜の念を持ち、それを懐かしむことも人生に潤いを与えてくれるのではないかと思います。

なお、この原稿を書くにあたって、空襲の年月日やその被害状況、人口数などは、門司図書館にある門司市史や統計年鑑から調べました。



右側面から見た岩田商店（手前は堀川運河）



門女？集合写真

門司区の変貌

ここ 10 年近くの間、門司港は大きな変貌を遂げました。門司を離れている方が、様変わりした門司港のことを大変よく知っているのには、驚かされます。新聞、テレビが門司港レトロ地区のことを全国ネットで何度も報道したからでしょう。

古い建物などを復元して、門司港駅周辺に集め、大正レトロを表看板にした、市の観光客招致策が功を奏し、週末や祝日には大勢の観光客が押しかけるようになりました。

その一方で、昔の繁華街は人通りが少なくなり、老舗が次々に暖簾をたたんでいます。

岩田商店も例外ではありません。平成 12 年 9 月、101 年の歴史に幕を下ろしました。

栄枯盛衰は世の常であり、浮かぶものもあれば、沈むものもあります。これが時の流れというものであり、自分はその流れをこの目で見、この耳で聞き、肌で感じてきました。

門司港は、繁栄しているのか、それとも衰退しているのか、それは見方によって異なります。

都市の盛衰を測るひとつの尺度として、人口動態があります。

市制を施行した明治 32 年 4 月の門司市の人口は 29,290 人でした。その後、大里町、東郷村、松ヶ江村を統合・編入しました。

また、海外渡航の拠点として繁栄が期待されたものですから、流入人口が後を絶たず、昭和 17 年には 143,069 人と膨れ上がり商業・港湾都市としての地位を確立しました。

昭和 34 年（関門国道トンネル開通の翌年）が 165,010 人でこれがピークでした。昭和 38 年、5 市合併で北九州市が誕生したときの門司区の人口が 156,850 人です。もうこのとき、既に門司の人口は減少の兆しをみせています。

昭和 40 年代前半、毎日新聞、日本銀行の小倉移転を皮切りに、都市銀行や証券会社は次々に門司港から撤退。コンテナによる大量・高速輸送は、港湾の労務形態を根底から変え、人減らしを促進しました。

大規模な港湾ストの間に貨物は博多に流れ、門司港にあった運輸・倉庫などの港湾関連会社の各支店は、出張所に格下げとなりました。

そして、とどめは旧国鉄の解体でした。近郊

から門司に働きにくる昼間人口は激減しました。関門国道トンネルや関門橋の開通は門司を停留地から通過都市に変えてしまったのです。

人口はいまでも毎年 1,000 人くらい減り続け、直近の平成 15 年 1 月が 112,000 人。

ピーク時に比べて 53,000 人も減少しています。53,000 人の人たちが生活するのに必要な消費が、一時的ではなく永久に減るということは、当然、商店や飲食店の経営が成り立たなくなるということです。

加えて、車社会の到来により、人々は、少しぐらひは遠くても、安価で豊富な品がそろっている大規模小売店まで買い物に行くようになりました。また、ディスカウントなどの物流改革はこれに拍車をかけ、門司区の旧繁華街から消費を奪いました。

門司区は、65 才以上の高齢者が人口の 23.7% も占める、老人の多い町になりました。ちなみに 7 区の中で最も多いのが八幡東区の 24.9%、最も少ないのが八幡西区の 7% です。公立病院の近辺には、いつのまにか斎場が林立しました。

レトロ地区に押しかける観光客は、旧繁華街の栄町方面には流れません。また、レトロ地区の売店の経営者で門司区の人はいく人かです。これが、私に見える門司港の現状です。

次号へ続く



門司港の思い出

赤嶺 壽子 (旧姓/稗田) (門女 36 期)

昭和初期、門司港棧橋通りから、門司港駅前通りにかけて、外国の方が通られるのをよく見かけました。駅前広場に面した果実店の、赤い林檎、黄色いバナナ、茶色のパイナップル。広場にはタクシーではなくて、人力車が数台客待ちをしているのも懐かしい思い出です。駅から東寄りに歩くと、岸壁に水揚げされた鮪が数10匹並べてある姿を、興味深く見ながら通った事があります。

門司港に外国船が接岸し、定着している様子を見て、陸地から海底までの深さに感動した事もありました。

鎮西橋、東本町の電車通り、山城屋百貨店、栄町、内本町、老松市場、老松公園、甲宗八幡宮、和布刈神社、戸上山、思い出の地は沢山あります。

女学生時代の、喜多久での海水浴です。家に帰り着く頃は、真赤に日焼して、疲れ果て、皆

無口で足の向くまま、帰路を辿っていました。無口と言えば、十里行軍も同様に思い出します。水を飲んではいけないと言われ、心の中では、水を飲んで汗が出ると体温調節が出来るのに、と思う反面、汗を出すエネルギーを節約すると言う事なのかなあと、半分疑問に思い乍ら、素直に指示を受け止めるべきだと、真面目振っていました。時代の状況もあったので、このような指導がされたのでしょうか。兎に角指示通りに皆頑張ったと思っています。しかし、現代は、水分を必要とすると解答されるでしょう。

人の一生には、辛い事、悲しい事、口惜しい事、嬉しい事、色々な経験をして成長して行くのです。自分の利益だけを考えると、人を不幸に陥れる事もあるのです。心を育て合う交流こそが、人として意義ある生き方だと考えます。人を大事にする事は、自分を大切にすることだと思います。



門司港レトロ/穴吹哲二郎

褒められもせず苦にもされず

佐古 圭次（北高9期）



同期の小林孝洋さんから、門浪会の原稿を頼まれたのであるが、一体何を題材にしたらよいのか思案はいろいろするのであるが、一向に埒が明かないので

ある。共通の話題が良いと思うのであるが、外国旅行はネタが古い、同期会の話は新参者が気が引ける、一応専門のダムの話はあまりに我田引水が過ぎる。

安請け合いはしたのであるが視点が定まらないのである。そうこうする内にタイムリミットの宣告である。何が何でもデッチあげなければならぬことになって、居直ることになったのである。

今日的雑感と云うことにしたらネタは何か。今一番は、お金・経済と云うことになりはしないか。世界の景気はここへきて急速に同時不況の様相を強めてきている。金融危機と実態経済の落ち込みが連鎖するなかで、今どんな対策が必要なのか。財政金融を中心とした経済政策の課題や不況脱却の見取図が求められている。私達もその真只中にあるのであり、誰も最大の関心をもって見守っているのである。

私達が社会と云うとき、その場面は生活や生産やサービスなど様々ですが、どの場面を捉えても経済つまりはお金を動かすことに行きつくのである。経済は魔物であるとも云われていますが、そのような事を意識したことは一度もありません。しかしながら、アメリカ発のサブプライムローンの失敗から一気に世界不況に落ち込んでみると、経済がどのような仕組みで、運営されているのか無関心では居られないのである。

そんな事で「お金とは何か」について元住友銀行竹下美光氏の書かれた古い書籍を開いてみ

たのである。北高諸兄の中には金融の世界に身を置いた方も多々居られることであろう。私ごときが口はばったい事を云える訳もないが、今だからを免罪符として赦して頂こう。

○ お金とは何か

江戸時代まではお金と云えば小判であった。小判は金で造られたものであり、それ自身が値打ちのある物であった。今日本でお金と云えばお札つまり日本銀行券である。紙切れの上に、聖徳太子と「日本銀行券 1万円」と印刷されているだけであるが、日本国中どこでも1万円で通用する。1万円の金貨でなければ品物は売ってやれない、などと云う人は誰もいない。お金とは云うが、金属のお金でなくても紙幣で十分に信用されているのである。日本銀行券ももともとは金貨の代わりとして発行されたものである。つまりは「日本銀行兌換券」と云うのであり、「此券引換に金貨拾円相渡可申候」と書いてあったそうである。その後いろいろな経緯を経て、昭和17年の日本銀行法で正式に兌換禁止となり、今のような日本銀行券となった。この時点で日本銀行券はタダの紙切れと同じになったのである。タダの紙切れをカメの中に入れて床の下に埋めて置いても、なんにもならないと云うことになったのである。

○ 交換手段ということ

こうして、日本銀行券は交換手段と云うことだけになった。使われなければ、何にもならないと云うことになったのである。交換手段と云うのは、例えば、AとBがいたとして、AはBが欲しがっている物を、BはAが欲しがっている物を持っている場合には、物々交換によって目的が達成されるのであるが、そういう人を探し出すことは、なかなか大変なことである。お金と云う交換手段を使って、間接的に交換すると云うことにすれば、非常に楽になる訳である。この場合、2人にとってお金は交換手段としてのみ使われたのであるが、お金の値打ちがどうであろうと何も関係ないのである。現実には、

今の経済社会では、交換と云うだけでなく、売って儲けると云う営利活動が行われている。ここでは、どれだけ沢山のお金が残せるかと云うことになり、収益を上げて蓄積を残す。その蓄積が目減りしないように、どう云う処置対策を講ずるか云う問題が生じてくるのである。

自由経済社会では、物やサービスの生産は毎年増えていくものである。生産が増えてゆけば、交換手段であるお金もそれに応じて、増やしていかなければならない。そうでないと、造っても売れない、買いたい人があっても買えないということになって、経済成長が妨げられることになる。ところが、お金が金貨であったとき、つまりは床下貯蔵などとなっていていつまでも出廻るときの考えがこびりついているものだから、お金の発行は必要以上に抑えようとする。理由は分からなくても、とにかくインフレになったら大変だ。用心に越したことはない云うことになる。こういうことでは景気はなかなか良くならない。その原因は、交換手段と云うことが良く分かっていないと云うことらしい。1万円札で沢山持っても利息はつかないし、盗難の恐れもある。必要最小限のものを残して預金や貯金にされる。だからお金は発行されても、交換手段として必要なだけを残して、銀行に、そして究極的には日本銀行に回収されるのであり、あまり心配する必要はないと云うのが竹下さんの論である。

○ 銀行券とは本来どういうものか

そもそも論はいろいろあるようだが、その一つがアメリカ建国の頃の為替手形であるらしい。建国当時のアメリカは、人口の急激な膨張、西漸運動による貨幣・信用需要の著増に対し、^{せいぜん}鑄貨が不足していたが、取引は盛んに行われ為替手形が大いに役立ったのである。生産を増やしたと同じ金額のお金、それは為替手形が代用して発行されたので、生産の拡大を阻害することは無かったのである。なぜ為替手形が銀行券に変わったかと云うと、為替手形と云うのは、個別的に、金額から手形を渡す相手、その

他すべて決まっていたので、これで生活必需品を買おうとすると、非常に不便だったのである。そこで千円とか一万円とか簡単な金額の手形にしてくれなどの要望が起きたので、商社が銀行をつくり、そういうものを発行した。これが結局、今の銀行券と同じものになったと云うのである。

○ 経済の舵取り

通貨供給量は定期的に発表され、物価騰貴の見通しに使われている。通貨供給量が増え過ぎると、物価が騰貴すると云う訳である。しかしながら、日本人には貯蓄心が旺盛である。世界に比類のない経済成長を成しとげている。貯蓄が増えすぎたら良くない、などと云うことはない。貯蓄の増加でこそ日本経済は成長したのである。貯蓄とお金は違う。お金は交換手段であるから、物やサービスの生産が増えたら、その増えた分だけお金も増やさなければならない。そして、その増えたお金は預金される。増えたお金の大部分は預金となるから、流通面でお金がだぶつくと云うことはない。物価騰貴の原因となるものでもない。

銀行の貸出はただちに同額の預金を生む。銀行が貸出をするとき、借方の口座に貸出額と同額が振り込まれて預金となるのである。借り手があってこそお金は天下の回り者となる。原因は借り手があると云うことである。これまで日本の企業は設備投資のために巨額の借入をしてきた。その結果、お金が出回り経済が順調に発展してきた。出回ったお金は貯蓄として預金された。預金は結果として増えるのである。預金が毎年順調に増えるということは、生産が順調に行われたということの証拠であり、そのような経済の舵取りが望ましいのである。景気が悪くなって、民間での借入があまり行われなくなったら、国が借入を増やすということで良いのである。

経済の舵取りは、貸出が原因であることが分かれば、あまり増え過ぎないように、貸出を押さえれば良いということになる。日本銀行が各

銀行ごとに貸出枠を規制するという政策が行われてきたが、効果的なインフレ抑制策でもあるのである。

アメリカ発の経済不況の波は、遠い国の話かと思っていたら日本にも伝播し、自動車メーカー、電機メーカー、機械メーカー等大企業が減産にシフト、請負、派遣従業員の契約打ち切りなど、国内景気が急速に減速してきた。雇用対策、セーフティネットの強化対策、住居対策等大わらわである。政府からも日銀に対し、利下げ、量的緩和などの金融対策の要求が日増しに強くなってきている。

一方、9月9日付の日経新聞に、銀行マネー滞留の記事がある。国内景気の減速を背景に、企業活動や株式市場に資金が回らない傾向が鮮明になってきた。リスクを敬遠するお金が銀行に集まり、貯蓄から投資への流れが停滞。預金に対する貸出金の比率を示す預貸率は、549兆円に対し404兆円で約7割に低迷している。現在の預貯金の利率は低いとは云え、こんな貸出で銀行の経営がうまくいくのかどうか。銀行も信用収縮により、預金があっても、貸出し特に中小企業向けには慎重にならないのであろうが、人事ながら心配である。

平成21年度予算の大蔵原案が発表されたが、従来の財政縮小から方向転換、大幅に国債を発行する方針を打ち出した。セーフティネットの強化や中小企業倒産防止のため、財政が出動、つまりは赤字国債の発行が必要となってきたと云うことであろう。

国債にもいろいろあるらしいが、赤字国債について考えてみよう。

政府が日銀からお金を借りるときには、利子は取られていないらしい。と云うのは、一応利子は払うのであるが、それをまた取戻しているから実質的には取られていないことになるのである。政府が日銀に国債を買い取ってもらって、日銀券を受取ったとする。国債の利子は毎年支払われる。そうすると日銀の収益がその分だけ増える。日銀の収益は余剰金の納付と云って、

毎年政府に納められることになっている。つまり政府は、国債の利子を実質的には払っていないのだから、日銀券が返って来なくとも、別に痛くも痒くもない、いつまでも市中で流通して良い訳である。すなわち量的緩和と云うことになる。

世界の人口はついこの前60億に達したと云うことであったが、もう65億になったとも聞く。あと何十年かすれば100億になるとも云うのである。これだけの人が食べる物を十分に口にすることが出来るのか、仕事を十分に与えられるのか、環境に与えるインパクトは、経済は延び続けられるのか、戦争は起こらないのか、苦のネタは尽きないのである。小説家の藤村某は、大いなる悲観は大いなる楽観に一致すると云ったが、そうは問屋が卸すまい。

榊原英資さんは金融システムについて、アメリカが強大な覇権を握っていた時代は終わった。これからは、緩やかな多様性を認める仕組みが必要だ。日本は長期的にアジア共通通貨をつくる方向をめざすべきだろうと云っている。

もうこんな混乱はごめんである。もっと安心・安全な社会・経済のシステムを構築してもらいたいものである。私は宮沢賢治ではないが“褒められもせず苦にもされない人になりたい”と思っている者であるが、こんな人ではこの変化の大きい時代を乗り越えて行くことはできないとも思うのである。強いリーダー出でよと云いたいのである。

ド素人の話につき合わせて、大変失礼しました。この他、利子及びその圧力の話、年金の話、経済のいろいろな話にも大変感心があります。9期の佐古です。この手の話に興味のある方、黙ってられない方、御連絡下さい。

